

◇東堂太郎と食卓末席組のたたかいと連帯 (第8回例会報告) .....	1
◇第七部 連環の章 (第五～第七) の報告を終えて (添田直人) .....	2
◇実践活動家の優れた感性——第8回講座印象記 (土田宏樹) .....	5
◇講座第三期への積極的なご参加を! .....	7
◇企画展「作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡」のご案内.....	7

### 東堂太郎と食卓末席組のたたかいと連帯

#### ——第七部「連環の章」添田直人さんの報告

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」第2期第4回 (通算第8回) は、2019年1月25日に開催されました。第七部「連環の章」第五「冬木照美の前身」から第七「早春」までを対象に、HOWS 受講生の添田直人さんが報告を担当しました。添田さんの報告は、『神聖喜劇』で描かれた部落差別へのたたかいを時系列に整理し、具体的に検討していくものでした。

まず、第一巻の「大根の菜・軍事機密」事件 (第二部「混沌の章」第二「責任阻却の論理」) で、神山上等兵、大前田軍曹による新兵教育の「無責任」性を追求する堀江隊長の「論理的」な事態追求傾向・「法治主義的」な対応が、橋本と冬木が部落出身者であることが記されていると思いきメモを渡された途端に鈍り、動揺を見せる場面が取り上げられました。添田さんは、堀江の動揺に、軍隊内における表面的な「公正性」の持つ限界を見出します。添田さんの見解は、東堂太郎の抱くブルジョワ法治主義の限界への意識とも呼応するものでしょう。

東堂は、冬木が部落出身者であることをほのめかす隊内の噂の「本質的不条理性」を克服するために、杉山に照会依頼状を発信しますが、第七部「連環の章」第七「早春」(第四巻) で、杉山からの返信を読んだ際に、改めて「部落民誰某ないし部落民一般にたいする隠微な差別的特殊視意識が私の内部に潜在する」のではないかと自問しています。添田さんは、こうした東堂の思考の運動が小説の形式に影響を与えたために、杉山への照会の場面が二つに分かれているのではないかと分析しました。東堂の思考の重層性を描くために、小説の形式が複雑化しているという分析は、『神聖喜劇』の成立過程を検討するための手がかりともなるはずです。

第五部「雑草の章」第一「大船越往反」(第三巻) では、外出先での自由行動の時間が描かれています。自由行動の時間に入った時、東堂と生源寺は、残っていた橋本に「いっしょに行こう」と声をかけますが、添田さんはこの場面を「『神聖喜劇』の中で一、二を争う美しい場面」と評しました。自身が部落民であることを宣言した橋本に、東堂と生源寺が親しく接するこの場面がなければ、橋本が冬木のことを東堂に相談する後の場面 (第七部「連環の章」第七「早春」(第四巻)) もなかったのではないかと添田さんは分析しています。また、添田さんは、「笹居文海堂」で『中央公論』を購入する東堂の行動は、あえて他の兵士に『中央公論』を購入している姿を見せつけることで、反応を促そうとするものであったのではないかと分析も行っています。

第六部「迷宮の章」第四「嫌疑の構図」(第三巻) では、東堂ら食卓末席組の間で、部落差別をめぐる

話題が持ち上がります。ここで博多弁を用いる東堂には、「理論」や「理屈」とは別のレベルで、ともにたたかう仲間と向き合おうとする姿勢があらわれていると添田さんは指摘します。さらに、東堂のこうした姿勢は、『神聖喜劇』を「サバイバル時代の労働者の教科書」と位置付けて高く評価した郵政労働者の平田文夫に引き継がれていると添田さんは述べています。自らの置かれた位置と垂直の関係にある権力とたたかうためには、法や論理を徹底的に駆使することが求められますが、仲間と連帯していくためには、それだけでは足りません。添田さんは、平田文夫の『ジャガーノート通信』（南部読書会、2019年）に登場する、昼食時に弁当を食べながら仲間の意見を聞く場面の雰囲気、食卓末席組のあり方に通じるものを見出しています。仲間との連帯を形成していくために必要なものは、抵抗するための理論への意識を共有することだけではないとし、変革のための意志を共有することの重要性を説く添田さんの報告は、実践的な連帯のあり方を探るための手がかりを提示しているといえます。

添田さんは、冬木が、自身に加えられる差別に積極的に対決しようとしないうちに注目していました。冬木は東堂とも一定の距離を取り続けていましたが、食卓末席組の連帯が深まり、広がりを持つことによって、東堂と冬木との連帯も生じ、『神聖喜劇』の物語は大きく展開していくことになります。添田さんの報告は、東堂のたたかいと食卓末席組の連帯との関わりを多角的に論じることで、汲み尽くされていない『神聖喜劇』の魅力と可能性を発掘しようとするものでした。福岡連隊差別事件や狭山事件裁判の『神聖喜劇』への影響を探る試みもなされており、教えられることが多くありました。また、添田さんの作成した「差別・被差別の論点表」は、『神聖喜劇』第一部「絶海の章」から第七部「連環の章」までに描かれた差別をめぐる場面を時系列に整理した労作であり、今後の講座においても参考になるでしょう。

討論では、部落問題には理詰めで否定するだけでは解決しきれない部分があることが改めて取り上げられ、自身の内側にも差別する意識が潜在しているのではないかと自省する東堂の意識が検討されました。また、革命の文学の主人公として、複雑な思想と内面を備えていることの珍しさとリアリティが高く評価されました。話題は、差別問題を実践的に解決するための議論へと発展していき、制度の中で差別が否定されたとしても、社会の中に残存する差別自体が解消されない限り、問題の解決にはならないということや、差別から逃げずに積極的に立ち向かうことの重要性が、改めて確認されました。遵法闘争の意義とその限界の問題に触れる意見も出ており、第五巻・第八部「永劫の章」における物語の展開への期待が高まってきました。

## 第七部 連環の章（第五～第七）の報告を終えて

### ——食卓末席組と弁当仲間による闘いの作法

添田直人（HOWS 受講生）

（配布した資料）

- 1 報告・抄録
- 2 差別・被差別の論点表
- 3 解放新聞埼玉版（2020年1月）
- 4 青木英五郎著作集の抜粋（初出『「狭山裁判」批判』1975年）

① 今回私が報告すべき範囲（「第七部 連環の章」の「第五 冬木照美の前身」～「第七 早春」）で、大きい論点とは、剣韜損傷摩り替え事件の容疑がかけられているにもかかわらず、冬木照美二等兵

が有効かつ積極的な反論ないし抗弁をしない点、その理由は何かということです。

② すでに、1月19日、“知りません禁止”“忘れました強制”事件の際に、冬木が東堂太郎に呼応したことを契機に、上官から目を付けられていました。その後、冬木にたいして、2月3日、大根＝軍事機密事件で神山によって刑事事件の「自首」のあてこすり、灰めかしをされます。神山→大前田→堀江隊長へ「メモ」が手渡されます。堀江隊長の対応は、「身分の高い低いは、軍隊には何の関係もない」ということでした。

ここに、隊内において差別リストが存在していることが明らかになりました。

上官によって差別の流布と公認化がなされます。軍隊における「論理的事態追及態度」、「法治主義的な対応」、「公平性」等の中身が薄っぺらなものであり、不条理かつ陋劣な部落差別を利用して隊内秩序を維持する姿勢が貫かれています。

以降、巖原閥において、さらに食卓末席組においてすら、聞くに堪えない差別談義が蔓延します（「第四 ある観念連合」）。その延長線上に剣韜損傷等事件が発生して冬木を容疑者扱いする動きが現出します。惨(むご)いといしか言いようがありません。このことの発端は、大根＝軍事機密事件における堀江隊長の対応にほかなりません。だから、冬木が疑われるという事態は、単なる対馬要塞重砲連隊内の一差別事象ではないのです。

③ 東堂は、「地方」の職場の同僚であり友人の杉山に連絡し、冬木の出生と刑事事件に関する情報を照会します（2月9日、昼食後）。その手紙を東堂はなぜ出したのか、その説明が二つの場面（「第六部 迷宮の章」の「第四 嫌疑の構造」と「第七部 連環の章」の「第四 ある観念連合」）に分かれて重層的です。

その理由は、一つは、冬木をめぐる隊内論議がいかにも不条理であることの東堂の怒りと危惧があります。正確な情報で現状を打破したいという思いがあるからです。もう一つは、入隊前の天福での差別暴行事件（天福の娘の徹底糾弾と比較して、冬木が本件において反撃しないこととの相違である。）を想起し、隊内の差別談義と剣韜等事件との共通点ないしは相違点への疑問があるからです。

このとき、差別談義にたいする東堂と生源寺の対応が丁寧です。東堂には、「誰彼を部落民だと詮索思考することは、自己の潜在せる差別性の顕現ではないか」と危惧します。差別論の思考それ自体は、自己がいかなる立場でそれをするのか明確にする必要があります。そのための方法は合理的ならざるものを含み、「精神の袴」（東堂の言葉）を脱ぎ、自己が纏っている「知識」「理論」を捨てて差別的な状況に生身をさらし、危惧し、差別との対峙点を仲間とともに見つけるのです。

『ジャガーノート通信』（2019年）注1の平田文夫さんは『神聖喜劇』の東堂的闘い方（強靱な記憶力を駆使した合法闘争）に学びつつ（同書上巻、p52）、繰り返し、「弁当仲間の分析」を参照し、判断材料にします。対国家権力、対社会的権力における垂直的關係ではなく、合理性や記憶力に頼らない水平的な關係が平田さんの弁当仲間であり、食卓末席組です。

2月11日の大船越往(おう)反(へん)の際の自由時間（すなわち、橋本による二度にわたる部落民宣言の直後）に、東堂と生源寺は橋本に繰り返して声を掛けます。帰隊の際の雑誌「中央公論」の購入は、東堂による水平的な關係の実践で、必ずしも合理的ならざる行為です。本作品で見逃してはならない重要な場面で、一、二を競う、美しい場面です。ここで東堂は旗を掲げたのです。

その反応は、谷村にたいして負の側面としてただちにあらわれますが、正の反応もあり、橋本の信頼を得ることによって、2月24日に、橋本から冬木の関する相談を持ちかけられるのです（2月21日の物音と目撃、橋本と冬木との対話の東堂への教示）。2月11日に、東堂と生源寺が「橋本いっしょに行こう」と繰り返し声をかけなければ、2月24日に、橋本から相談を持ち掛けられなかったでしょう。心

が熱くなります。

④ 杉山から受け取った二通の手紙で、入隊前の1940年3月20日に、豊前屋での差別、暴行と冬木の刑事事件のあらましがわかります。

私は、豊前屋刑事事件と剣韃損傷等事件の冬木、及び、狭山事件、狭山差別裁判の石川一雄さんとの相似性を強く感じました。作者・大西は、旧蔵書、青木英五郎『「狭山裁判」批判』（1975年）を参照してこの部分を執筆したと考えられます。報告後の討論で参加者から教えていただき、これが大西の旧蔵書であることが判明しました。大変感謝します。

大西が青木前掲書を参照した該当部分は、本報告で配布した資料と同じものと考えられます。石川さんは捜査、取調の責任者、埼玉県警・長谷部警視の「白自すれば10年で出してやる」という「約束」を信じてしまったために、死刑判決後も虚偽白自を維持したのですが、青木前掲書は、その理由を明らかにしたものです。一つは、中田直人弁護人の控訴審における証言で、一審最終弁論終了後、判決直前の辩护人接見の際に、「石川くんのとった態度が、おそらくこれは、生涯忘れることができない[……]きみは死刑の判決を受けるだろうということを、辩护人が言っているのに、にやりと笑って、いいんです、いいんです」と石川さんが言ったそうです。死刑判決を恐れていない（虚偽白自を維持し続ける）という異様な様子がわかります（同書 pp13-18）。

もう一つは、同和教育に長年携わってきた平井清隆の証言で、差別に起因して部落青年にみられる精神現象について説明し、「ひとたび人を信じたとなると、正邪を論じないで、地獄の果てまでも、その人と共に歩こうとする[……]それを利用して、まさにその信頼を裏切るような背信行為をする、そのような態度をとる部落外の人々が往々にしてある」という部分です（同書 pp80-83）。

豊前屋刑事事件と剣韃損傷等事件、及び、狭山事件、狭山差別裁判との間に、どこに相似点があるのか（作者・大西はどのように参照したのか）、以下の表をご参照ください。ポイントは三つあります。

（ア）石川さんが捜査途中から虚偽白自に転じ、それを一審の死刑判決以後も維持し続けていることと（長谷部警視との「男と男の約束」を信じている）、冬木が剣韃等損傷事件で吉原との「約束」を信じていることとの相似性

（イ）石川さんが一審の浦和地裁で虚偽白自を維持し、自分が犯人だと認めているのも関わらず、辩护人は無実を争っていることと、冬木が豊前屋刑事事件で正当防衛を辩护人にたいしても一切主張していないにもかかわらず、冬木の辩护人は正当防衛で弁護（すなわち違法性阻却による無罪主張）していることとの相似性。

（ウ）石川さんは第二審の冒頭に虚偽白自から脱して無実主張に転じた控訴審判決で、部落差別による違法捜査とでっち上げであるという主張をしたが、寺尾裁判官は、部落差別への言及がまったくなかったことと、冬木の豊前屋刑事事件の判決で、『予審終結決定』、『論告』、『判決理由』に『特殊部落ママ（の出身者冬木）』への考慮もしくは言及がまったく顕在しない」（4巻、p457）こととの相似性。

（狭山・豊前屋刑事事件・剣韃損傷等事件の比較）（表・略）

石川さんが浦和地裁による死刑判決後も、自らが犯人である内容の虚偽白自を維持した理由と、剣韃損傷等事件のでっち上げにもかかわらず、冬木が積極的な抗弁をしない理由とは、同じである可能性が推測できます。ただし、狭山事件と豊前屋刑事事件との違いがあり、狭山事件の石川さんは無実であるのにたいして、豊前屋事件では、冬木は、差別がおそいかかってきたことを避ける行為、それが法的には正当防衛だったとしても、自らの行為によって酒井が死亡したことの責任は取らねばならないと思っ

た可能性があります。また、豊前屋刑事事件と剣韜損傷等事件とは、内容が異なります。前者は、不幸にも酒井が亡くなりましたが、後者では、冬木が何らの行為をせずに不条理な疑いがかけられているのです。その前者と後者の違いの違いを突き、行動開始を決心するのです。

⑤ 石川さんが差別に眠り込まされていたことに気づいたきっかけは、獄中でけっして一人ではなかったことによります。三人の重要人物がいることがわかっています。一人は、報告で配布したように三鷹事件の竹内景助さんで、死刑囚同士の交流の際、狭山事件発生以来の新聞スクラップを持って待ち構えていて、字の読めない石川さんに何と報道されているのか読んで聞かせ、虚偽自白がまちがっていることを教えました。二人目は拘置所の看守で、無実気づき、非識字者である石川さんに文字や手紙の書き方を教え、支援者へ出すための切手を差し入れてくれました。担当する死刑囚に直接差し入れると処分されるおそれがあるため、石川さんの父の名を差出人にした封筒で、看守の妻が、毎月多額の切手を送りました（石川さんの仮釈放後、看守の定年退職をまって明らかになる。）。解放同盟の支援がまだ弱かったころです。もう一人は荻原佑介さんです注2。荻原は戦時期に全国水平社創設メンバー平野小剣（しょうけん）とかかわりがあった人物です。戦時期の平野と荻原は天皇主義右翼でした。このため荻原は戦後部落解放運動の主流からはずれませんが、狭山事件の死刑判決が部落差別ゆえにでっち上げられた事件であることに気づきました。解放同盟が石川さんの救援に逡巡していたころ、荻原は、面会を頻繁に行い、控訴審で無実の主張をすべきことを強く促しました。差別にたいする部落民としての感性がそうさせたのであり、荻原がいなければ控訴審以降の石川さんの闘いはなかったと考えられます。

死刑囚となっても差別されていることが理解できなかつたと語っているように、獄中に入る以前の石川さんは、むしろ孤独であって、獄中の方が孤立無援ではなかつたのです。この三人とのかかわりは、「生と存在の深淵をふとのぞき込んだような身震い・一種の悪寒のような畏怖の念」をおぼえます。

冬木が眠りを覚まして反撃する契機においても、冬木が一人ではないこと、東堂と橋本、鉢田や生源寺ら食卓末席組がいることが想定されます。部落差別は惨く、それと対決するものへの仕打ちは冷たく、陋劣ですが、ともに闘うものがないわけではけっしてないのです。東堂のように、「この心あながちに切なるもの、とげずと云ふことなきなり」（正法眼蔵随聞記、「この気持ちが度はずれて痛切な者は思いを遂げずということはない」という言葉に頼りたくなります。それはあたかも祈りの先をめざす光の輝きようです。

祈りと眼差しが、冬木の「双眼の青い輝き」に自動的に反映されるわけではなく、そのための「作法」が必要です。それが何かを食卓末席組と弁当仲間に投げかけつつ、熱き心をもって、ひきつづき探りたいと思います。

ご参加された皆様方、討論とご意見、ご感想に心から感謝します。ありがとうございました。

注1 平田文夫、『ジャガーノート通信』はPDFがネットで閲覧できる（2020年2月5日確認）。

<http://www.rr.em-net.ne.jp/~said3defense/jixyaga-no-to.pdf>

注2 朝治武、『差別と叛逆 平野小剣の生涯』、2013年。

## 実践活動家の優れた感性——第8回講座印象記

土田宏樹（HOWS 受講生）

添田直人さんの報告でことに印象に残っているのは、映画『男はつらいよ』の或る場面についての言及である。

さりげない一場面なのである。1981年公開のシリーズ第21作だ。お馴染み、妹さくらの夫である印刷工の博が、着替えと一緒に月刊誌『世界』を脇に抱えている。

その頃この雑誌には、T・K 生署名による「韓国からの通信」が連載されていた。当時の韓国は軍事独裁政権下にあつて民主化を求める人々は厳しい弾圧に呻吟していた。蜂起した民衆に軍隊が突入して多くの死者を出した光州事件は前年1980年のことである。添田さんの報告レジメから引用すれば

「私は毎号これをドキドキしながら読みました。このころは光州蜂起の後、独裁政権の弾圧がひどく韓国国内では闘いの情報が切断され皆無に近かったので、『世界』に掲載された『韓国からの通信』が書かれた日本から韓国に入って情報を知るといった動きがあつたのです。私が毎月これを読むのと同じ内容を韓国の闘う学生が読んでいて感づいていました。その『世界』を、博が持っているカットが上映されることによって、その映画を見る日朝連帯闘争を闘う観客は共感するのです。きっと、<異議なし>とつぶやいたと思います。」

山田洋次監督は、松竹喜劇映画とはおよそ場違いなあの雑誌を、チラリとながらあえて大写しすることによって隣国の民主化闘争への連帯の思いを顕わしたのであろう。『神聖喜劇』には、町の本屋に入った東堂太郎が『世界』ならぬ『中央公論』を、他の兵士たちが見ている前で購入する場面がある（第三巻の「大船越往反」のところ）。添田さんは、あの映画の場面との相似性をここに見る。

「東堂が『中央公論』を他の兵士の前で購入したのは、あえてそうしたのであつて他の兵士の中に闘う部分があることを見せて、反応をうながしたのです。」

内省と懐疑をくりかえしながら虚無主義を脱しつつあつた東堂が、あの時点でそこまで目的意識的であつたか私には確言できないけれど、映画のあの場面に胸を熱くしたことにここで思いを至らせる添田さんの感性は、優れた実践活動家のそれだと思う。

そのとき東堂が購入した『中央公論』には偶々、某新聞社の最近帰国した元モスクワ駐在員の論考『独ソ戦とソ連の大衆』が掲載されていた。ドイツ軍の電光石火の侵攻によって敗戦また敗戦、土俵俵にまで足がかかったソ連。しかし、その絶体絶命のところからふてぶてしく焦土抗戦に立ち上がりつつあるソビエトロシアの人々。その様子を元モスクワ駐在員は慎重な筆の運びながら伝えている。左翼というのではないが、スラヴ魂といったようなものに惹かれてソ連ならぬロシア最前線の同年兵・曾根田に、東堂はその論考を読ませたりする。そうした行動が東堂の仲間作りになっていくのである。私はこの小説を読み始める前は、特異な個性（超人的記憶力）の持ち主が孤立を意に介せず闘っていくようなイメージを勝手に抱いていたのであつたが、誤解であつた。「食卓末席組」と括られる東堂の仲間たちがそれぞれに魅力的である。東堂と正源寺との関係にコミュニストと良心的ブルジョア・デモクラットとの協力関係を思うのは見当違いであろうか。

それにしても、前記『独ソ戦とソ連の民衆』を巡る記述から窺い知れるのは、ファシズムが打倒されることをこいねがいがながら、しかしその実現可能性には絶望していた人々をソ連の土壇場からのふんばりがいかに励ましたかということだ。自らが関わっていた非合法の反戦活動を治安当局の弾圧によって一撃の下に叩き潰された経験を持つ東堂が、そうして陥った虚無主義から脱していく背景に独ソ戦の帰趨は決して小さくはないのである。すこし先走れば、第五巻に「私のドイツ・ソ連戦争観は、私の虚無主義のいわば『函数』であるらしかった。逆の関係もまた成り立ち得なくはないのかもしれないが」という東堂の述懐が出てくる（第二、模擬死刑の午後・続）。ロシア最前線の曾根田に形象されるような「民衆兵士の蒙昧さと楽天性からくるある力強さ」（ニュース6号掲載の渥美博さんの文章から引用）とヴォルガの大河に擬せられるようなソ連人民の悠然さとは通じ合うものがあるらしい。

被差別部落出身の冬木照美二等兵の行動と心理を、狭山差別裁判の被告・石川一雄さんの場合を引き

ながら考察したのは今回の報告のユニークな、そして優れた点である。先述した「実践活動家の優れた感性」がここでも光る。添田さんは狭山差別裁判糾弾闘争に学生のと時から関わってきた。

発生した「剣韃すり替え事件」で冬木冤罪を阻止に動く東堂をわれわれは次の第五巻において目にするだろう。そこへ向けて重要なのは、通奏低音のように繰り返される東堂の懐疑と内省だ。報告は「省察の変遷、東堂の『懐疑』、内省の意義」という項（レジメ 16 ページ）を設けてそれに論及した。しかし、討論では全体に発言は活発だったのに、この部分についての言及は参加者から少なかったのは、当日の進行を務めた私として反省しなければならない。

講座最終回にご参加ください！

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」、いよいよ最終回を迎えます。これまでの議論の蓄積を踏まえ、最終巻後半を読み進めていきます。最終版でのさまざまなできごとの意味、東堂の回生の実質、物語のその後、作品の現代的異議などについて議論できればと思います。みなさんの積極的なご参加を呼びかけます。

3月21日（土） 第八部 永劫の章（第四、終曲）——東堂太郎のその後  
報告＝杉山雄大（HOWS 受講生）

## 企画展「作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡」のご案内 2

大西巨人の文業を紹介する企画展「作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡」が2月4日（火）から、二松学舎大学九段キャンパスで、また、2月21日（金）から東京古書会館で開催されます（開催日および開催時間は下記の通りです。開催期間などが会場で異なっていますのでご注意ください）。これは、自筆原稿類を始めとする大西巨人の資料が二松学舎大学に寄託されたことを記念して行われるものです。メモ、草稿、覚書、原稿、ゲラ、手入れ本における加筆修正の痕跡からは、形式と内容との高次の融合を求めて飽くことをしらなかった大西巨人の持続的な意志が伝わってきます。

二松学舎大学会場では、『神聖喜劇』関連資料を、東京古書会館会場では、『精神の氷点』から『八つの消滅』までの諸作品の関連資料を紹介しています。ぜひ足をお運びください。会場には感想用のノートを用意しています。ご覧になってお感じになったことを記していただければ幸いです。

会場：二松学舎大学 九段1号館地下3階 大学資料展示室（『神聖喜劇』を中心に）

東京古書会館2階情報コーナー（『精神の氷点』から『八つの消滅』まで）

期間：二松学舎大学会場 2020年2月4日（火）～3月14日（土）10：00～16：00

閉室日[日曜・祝日、及び3/9(月)]

東京古書会館会場 2020年2月21日（金）～3月14日（土）10：00～17：00

最終日は15：00まで

閉室日[日曜・祝日、及び3/9(月)]